

葉 ダイコン (露地) (黒ボク土)

〔土壤肥料〕

本作目は、栄養生長から生殖生長に不完全ではあるが転換する型である。窒素の吸収パターンは山型を示し、収穫後の土壤中残存養分は比較的強く制御できる。リン酸に対しては低～中領域に適応できる。ただし、窒素については敏感に反応するが、リン酸、カリについては鈍感である。本作目は、他のアブラナ科野菜と同様に、乾燥などによって石灰やホウ素の欠乏症が発生しやすいので、この点についても十分に留意する。

〔病害虫・雑草防除〕

圃場の排水を良好にする。病害虫の早期発見、適期防除を行い、化学農薬使用の低減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
有機質資材 施用技術	土壌診断に基づいた低成分含量堆肥(稲わら堆肥及び落葉堆肥等で、窒素、カリ含量が1%以下の完熟したもの)の施用を基本とする。 肥料成分含量の高い畜産系堆肥の施用にあたっては長期的な視点にたった投入量管理を行う。 緑肥作物を利用する。	堆肥は前作施用 2～3t/10a
化学肥料 低減技術	基肥は局所施肥(条施肥など)するとともに、窒素、カリについては追肥型の施肥法をとることを基本とする。 肥効調節型肥料と速効性肥料とを組み合わせ、養分吸収特性に対応した施肥成分の供給を行う。 有機質肥料による施肥を行う。	成分量で慣行施肥量の20%減 有機質肥料併用の場合には化学肥料低減率20～50%
化学農薬 低減技術	微生物農薬を利用する。 (対象：軟腐病) B T剤をローテーション散布に位置づける。 (対象：コナガ、ヨトウムシ類など) 光反射マルチを利用する。 (対象：アブラムシ類、ウイルス病、雑草など) 防虫ネットで被覆する。 (対象：アブラムシ類、ハイマダラノメイガなど) 性フェロモン剤により交尾阻害を図る。 (対象：コナガ、ハスモンヨトウ) 性フェロモン剤による発生予察・誘殺を行う。 (対象：コナガ、ハスモンヨトウなど) マルチ栽培を行う。 (対象：雑草など)	慣行使用回数の 20%減
その他の 留意事項	有機質肥料は、播種の遅くとも20～30日前までに施肥し、分解を促進させておく。 水田転作など灰色低地土で栽培する場合には、作土深の確保などを行うとともに、優良有機物資材の施用を基本とし、溶脱防止に留意したきめ細かな施肥法をとる必要がある。 盛土などが行われている圃場では、その客入土壌の改良を行う。	

葉ダイコン (施設) (黒ボク土)

〔土壌肥料〕

本作目は、栄養生長から生殖生長に不完全であるが転換する型である。窒素の養分吸収パターンは山型を示し、収穫後の土壌の残存養分は比較的強く制御できる。しかし施設では、残存養分の過剰な蓄積を回避に注意する必要がある。リン酸は、低～中領域に適応できる。ただし、生育前期は窒素については敏感に反応するが、リン酸、カリについては鈍感である。他のアブラナ科野菜と同様に、乾燥によって石灰やホウ素の欠乏症が発生しやすいので、この点についても十分に留意する。

〔病害虫・雑草防除〕

圃場の排水を良好にする。病害虫の早期発見、適期防除を行い、化学農薬使用の低減を図る。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
有機質資材施用技術	<p>土壌診断に基づいた低成分含量堆肥(稲わら堆肥及び落葉堆肥等で、窒素、カリ含量が1%以下の完熟したもの)の施用を基本とする。</p> <p>肥料成分含量の高い畜産系堆肥の施用にあたっては長期的な視点にたった投入量管理を行う。</p> <p>緑肥作物を利用する。</p>	<p>堆肥は前作施用 2～3t/10a</p>
化学肥料低減技術	<p>基肥は局所施肥(条施肥など)するとともに、窒素、カリについては追肥型の施肥法をとることを基本とする。</p> <p>肥効調節型肥料と速効性肥料とを組み合わせ、養分吸収特性に対応した施肥成分の供給を行う。</p> <p>有機質肥料による施肥を行う。</p>	<p>成分量で慣行施肥量の20%減</p> <p>有機質肥料併用の場合には化学肥料低減率20～50%</p>
化学農薬低減技術	<p>B T剤をローテーション散布に位置づける。 (対象：コナガ、ヨトウムシ類など) 微生物農薬を利用する。 (対象：軟腐病) 夏季に太陽熱土壌消毒を行う。 (対象：土壌病害虫、雑草など) 光反射マルチを利用する。 (対象：アブラムシ類、ウイルス病、雑草など) 流動性被覆資材を利用する。 (対象：べと病など) 近紫外線除去フィルムを利用する。 (対象：ハモグリバエ類など) 開口部やサイドを防虫ネットで被覆する。 (対象：アブラムシ類、ハイマダラノメイガなど) 性フェロモン剤により交尾阻害を図る。 (対象：コナガ) 性フェロモン剤による発生予察・誘殺を行う。 (対象：コナガ、ハスモンヨトウなど) マルチ栽培を行う。 (対象：雑草など)</p>	<p>慣行使用回数の20%減</p>
その他の留意事項	<p>有機質肥料は、播種の遅くとも20～30日前までに施肥し、分解を促進させておく。</p> <p>水田転作など灰色低地土で栽培する場合には、作土深の確保などを行うとともに、優良有機物資材の施用を基本とし、溶脱防止に留意したきめ細かな施肥法をとる必要がある。</p> <p>盛土などが行われている圃場では、その客入土壌の改良を行う。</p>	